

ラフミエル・フェルドマン「ヤンとピート」(翻訳と改題)

西 成 彦

(解題)

19世紀から20世紀にかけて膨大な作品を産み出したイディッシュ文学は、ちょうど誕生の地であった東欧の「ロシア領」から多くの移民・難民が吐き出されたことによって、広範な地域へと「散種」され、多くの土地で、一定期間、根を下ろした。ポーア戦争以降、「白色化」と、「アパートヘイト」を準備する「人種主義」が並行して進められた南アも例外ではなく、とくに「ロシア領」のリトアニア地域からのユダヤ移民が多かった。そして、そうした東欧ユダヤ人が母語としていたのがイディッシュ語だった。イディッシュ語は、中世高地ドイツ語を母体にしたゲルマン系の言語であったから、南部アフリカに住むヨーロッパ系の入植者や商人が話した英語やドイツ語、なによりアフリカンス語とは親和性の高い言語だった。結果的に、イディッシュ語話者の多くは、比較的容易にアフリカンス語や英語を習得できたが、少なくともジャーナリズムや文学は、一定期間、ヘブライ文字を用いて書くイディッシュ語の定着と温存に寄与した。後に英語作家となるガートルード・ミリンやダン・ジェイコブソンらは、イディッシュ語を話した前の世代の記憶に郷愁を覚えつづけていたと考えられる。

そもそも南部アフリカとユダヤ教徒の関わりは、古く15世紀まで遡り、バスコ・ダ・ガマの喜望峰発見(1497)に向けて、ユダヤ教を奉じる科学者や地図作成者が果たした役割は大きかったと言われる。またオランダの東インド会社のなかにはイベリア半島から流れ着いた元ユダヤ教徒や、東欧でのユダヤ教徒迫害を逃れて同じくオランダに流れ着いた改宗ユダヤ人などが含まれたとされている。ただ、ユダヤ教徒の本格的な定住が始まるのは、19世紀に入って英国が進出するようになってからで、ドイツ系のユダヤ教徒がやってくるのもナポレオン戦争の時代に入ってからだった。そして、1841年にケープタウンに最初のユダヤ共同体が成立した後、奥地でのダイヤモンド鉱発見や金鉱の発見などがあって、ユダヤ教徒の生息圏は徐々に広がっていった。そのなかには、英国資本主義を支えたものもいれば、どこでもそうであったように行商で少しずつ蓄財に励んだものもいた。リトアニア系ユダヤ教徒の到来は、そうした前史を追うようにして、急加速したのである。

もっとも、当時の南アがユダヤ教徒の入植に好意的であったかどうかと言えば、そうとは言えない。プロテスタント系のポーア人は、ユダヤ教を忌み嫌ったし、とりわけ、アジア系(とくに英国臣民として上陸するインド系)移民を排除し、ヨーロッパ系の移民のみを認めようとした政府が移入民に課した「識字能力試験」において、イディッシュ語をヨーロッパ言語に含めるかどうかでは、何年も折衝がくり返され、1906年になってようやくイディッシュ語は「ヨーロッパ言語」のひとつと認められたのだった。

また、南アの「国民党」が人種主義的なナショナリズムを強化していったなかで、ナチスによる迫害を受けたドイツ系ユダヤ人難民の受け入れを拒否するなどの政策がとられるようになった1930

年代に、ユダヤ教徒の地位はきわめて危うかった。しかし、南アが第二次世界大戦を「連合国」側について戦ったこともあり、ユダヤ教徒が生死の危機に直面させられることはなく、また「アパルトヘイト」時代の到来後も、ユダヤ教徒は「ホワイト」の一部（人口比では、その3パーセント程度）でありつづけることができた。そして、イディッシュ語ジャーナリズムが生き延び、イディッシュ語文学もまた一定の「キャンオン」を産み出すまでに至ったのである。



さて、以下に訳出するラフミエル・フェルドマンについてだが、1897年、カウナス（ポーランド語ではコウノ）近郊の小村に生れた彼は、1910年に家族で南アに移住し、すでにリトアニア時代に受けていた世俗的なイディッシュ語教育を、ヨハネスブルグでも継続することができ、シオニスト系のグループに属する開明的なユダヤ人として成長する。成人してからパレスチナを旅行したことも、シオニストとしての自覚を高める上で重要だった。その後、「ユダヤ手工業農業促進協会」（1880年代のロシア領で結成されて、1938年に弾圧されるまでソ連邦でもつづき、1921年にはベルリンにも新しい拠点ができる。略称、ORT）や「ユダヤ厚生協会」（1912年にロシア領で結成され、ユダヤ人の福利厚生を推進した。UNICEFの前身とも言われる。略称、OZE）、「ユダヤ移住斡旋委員会」（1921年にベルリンで旗揚げして、1927年には、ヘブライ難民受入救援協会 HIAS やユダヤ移民協会 ICA などとの連携が実現して、パリで HICEM が結成され、そこに合流する。通称は「エミグ・ディレクト」）などの南ア支部を手伝うなどした。また、南ア自体に対する貢献としては、1940年代から50年代にかけて「リチャード・フェルドマン」Richard Feldman の名前でヨハネスブルグ市議なども務め、ユダヤ系市民の定着と権利保障に尽力した。

小説執筆に精力を傾けたのは、おもに1930年代で、短篇集『黒と白』*Shvarts un ways* が、1935年にワルシャワで刊行された。本書に収めた「ヤンとピート」は、同短篇集の増補版（ニューヨーク、1957）に収められたものであり、1930年代末の作品だと考えられる。ユダヤ系移民を主人公にしたものが多くはあるが、短篇集のタイトルからも分かるように、アフリカ系の登場人物を積極的に描くように努め、本短篇に関していえば、登場する白人もユダヤ系とはかぎらない設定になっている。

しかし、人種間の友情とその破綻、あるいは貶められた「黒人」や「カラード」たちの反乱とその鎮圧という、「アパルトヘイト」体制の前段階を彩った出来事とその背景がここには端的に描かれている。イディッシュ語文学もまた、南ア文学の一部として、その社会の全体をも描くことに大きな貢献を果たしたことがよく分かる。

なお、「ヤンとピート」の訳出にあたっては、上記、ニューヨーク版を底本としたが、その他、その短篇のうち三篇が下記のアンソロジーに収められている——*From a Land Far Off, A Selection of South African Yiddish Stories*, Ed. By Joseph Sherman, Jewish Publications, Cape Town, 1987)。

没年は1968年。

שווארץ און וועגן



פון
רחמיאל פעלדמאן

②ニューヨーク版『黒と白』（1957）表紙

>>>>>>>>>>>><<<<<<<<<<<<<<

「ヤンとピート」 שוואַרץ און ווייס

ラフミエル・フェルドマン

רחמיאל פּעלדמאַן

それは12月16日で、ディンガーンの日¹⁾、つまりボーア人がズールー人と戦った戦いを記念する、南アの白人にとっては祝うべき一日のことだった。ボーア人の歴史において重要な日付で、1838年²⁾のこの日、黒人の抵抗は平定された。以来、白人と黒人の主従関係は決定的なものとなった、そんな一日なのだ。

それからまる一世紀が過ぎた。英雄的なズールーの誇りは打ち砕かれた。奴隷状態に置かれた彼らは、その後、世代交代をくり返し、みんな卑屈で、上の言いなりになっている。過去のこともほとんど忘れ去られ、髭の白くなったご老人が昔話、遠い昔の話を聞かせるだけだ。むしろ、白人たちの方がこの日のことをよく覚えている。12月16日がやってくるたびに、彼らはお祝いし、子どもたちについてその日のことを語って聞かせる。過去を記念し、神に感謝をささげる日だというわけだ。

同じ12月16日のことを黒人もまた思い出してはいた。奴隷として生きることは辛いことだ。それに身分証^{パス}のことがある。黒人専用の身分証^{パス}で、それが彼らの奴隷である徴なのだ。革命暴動を組織する試みもあった。みんなで身分証^{パス}を焼き捨てようという呼びかけが都市の黒人たちになされたのだ。

それはほんの始まりの出来事にすぎなかった。恐怖は大きく、権力は強大だ。そして組織されない烏合の衆の群れは脆弱で、なにができるというものでもない。結局は二百人程度の黒人が集結しただけだった。二百人が身分証^{パス}を火にくべた。身分証^{パス}なんて誰が携帯するものか！

するといつのまにか警官隊がやってきていた。人だかりに襲いかかった彼らは、警棒をふりまわし、あとは逃げるが勝ちの状態だった。

若くて、ブロンドの髪をした警官のヤンは、すばしこさではだれにも負けなかったから、逃げまどう暴徒を追いかけ、^{シャンボク} 鞭³⁾を颯爽とふりあげ、逮捕した人間には鎖をかけ、ありったけの腕輪を使い果たした。こうなったらもう誰も逃げも隠れもできないのだ。そのはたらきぶりは見事で、次から次へととらえた男は、助手をつとめる黒人に引き渡す。ソト族の若者がひとりすり抜けて逃げようとしたが、ヤンにかかると、足の速さでかなわない。あっという間に相手を捉え、右手に持った^{シャンボク} 鞭³⁾を使って、ヤン様から逃げられるはずがないと、「呪われた黒んぼ^{カフイール}」には思い知らせてやる。そして左手ではつかんだ相手の方をつかんで放さず、^{シャンボク} 鞭³⁾を持った右手をふりあげた。そのとき、はじめて二人の目と目があつた。ヤンはふりあげた手を下ろさなかった。ヤンは、とつぜんどうしているか分からなくなったのだ。ふりあげた腕は力が抜けたようにだらりとなった。すっかり目を閉じて、いまにも^{シャンボク} 鞭³⁾がふってくると思っていたソト族の男は、怪訝そうに眼を開いた。

二人は互いピートはがだれであるかに気づいた。

——ヤン！

——ピート！

ピートは声もなく驚いたように警官の顔を覗きこんだ。ヤンに会えたという声に出ない喜びで、彼はしばし自分の置かれた立場を忘れた。そして同じ喜びをヤンの表情のなかに読み取ろうとした。しかし、ヤンはピートから目を逸らした。ヤンはどうしたらいいのか戸惑った。そして、最後に「手錠」をかけるから手を出せと命じたのだった。ピートは思わず我に返った。思いがけない再会にホロリとなった自分が愚かだったと目が覚めた。手錠をかけるならかけろと、こわばった手を突き出した。鋭い目で相手の顔をうかがい、その目をとらえようとした。しかし、ヤンは目を背けたまま、弱弱しい声で「来い」とだけ言い、ピートの肩に手をかけて突いた。署まで行こうという合図だった。

* *
*

二人とも無言だった。子ども時代を思い起こしていたのだ。二人はトランスヴァール北部の「オレンジフォンテイン」という農場で、同じ週に相次いで生れた。しかしヤンが一歳にもならないうちに母親が亡くなり、農場のしがない雇われ人だった父親は、農場主の厚意で、ひとりの女性を家政婦をあてがってもらった。マリアとって、黒人を夫に持つ女だった。

マリアにはピートという子どもがいて、要するに、二人はマリアによって育てられたというわけだ。幼いピートには部屋に上がることが許されなかったけれど、ヤンとピートは二人並んで庭に寝た。はいはいを始めたのも、あんよができるようになったのも一緒だった。ヤンの父親は妻に死なれた後、再婚したが、その継母はヤンに目もくれなかった。ヤンの世話はマリアに任せておけば十分だと考えていたのだ。子ども時代のヤンとピートは、ずっと遊び仲間だった。おかげで、ヤンは農場の他の子どもたちからはバカにされ、^{カフイー}黒んぼ呼ばわりを受けた。ピートと遊んでばかりだからそう言われることは分かっていたが、ピートと遊んで何が悪いのかは理解できなかった。ともかく二人は物心ついてからずっと仲良しだったし、ピートと遊ぶのはほんとうに楽しかった。ピートは素直だし親切だし、まっすぐにこっちに向かってきてくれる。以心伝心とは二人のあいだのことだった。そして、何を言っても、「承知しました」と快い返事が帰ってきた。

そのヤンが十歳だった時のこと、彼はほんでもないことをしでかしてしまった。生まれたばかりの仔牛をおもちゃにして、なぶり殺しにしてしまったのだ。しまった、このままじゃあ、ひどいお仕置きを受けることになる。そこでピートのところで匿ってもらうことにした。ピートに自分の犯した過ちを打ち明け、おいおい涙を流しながら、もうおしまいだと口にした。ピートはそんなヤンのことが可哀そうで堪らなくなり、自分が代わりに罪を着てやろうというようなことを言った。ピートなら、平手打ちのひとつやふたつ屁でもない。するとヤンはむくっと起き上がり、涙をぬぐって、一言も言わずにそこを去った。ピートの一家が住む、泥でこしらえた家からヤンの家までは四百ヤードほどだった。とほとぼる帰る道のり、ヤンの心はさっぱりと晴れあがった。ピートのやったことにするという手を考えつかなかった自分が不思議なくらいだった。

すると、途中で父親にばったりと出くわした。彼は事の次第を澁みなく話して聞かせた。父からピートを呼んで来いと言われた彼は、ピートの家に戻ると、小さな声で言った。

——ピート、おやじが呼んで来いって。

ピートはそのときもヤンと目を合わせようとしたが、ヤンはそっぽを向いたままだった。いまと

まったく同じだった。二人で並んで歩きながら、一言も口を利かなかった。

ピートが受けた罰はそれこそ酷いものだった。ヤンの父親は容赦なく血が出るまで打ちのめし、打撲の痛みは一週間消えなかった。しかし、なにより堪えたのは、その仔牛の一件以来、ヤンはぶいと背中を向けて、もはや友達ではないかのようにふるまうようになった、そのことだった。そして彼までが平気で黒んぼ^{カフィー}と呼んでくるようになった。彼はピートが罪もないピートが泣き叫ぶのを聞きながら、もう友達でいるのはやめようと思ったのだ。自分がそのあだ名と呼ばれ、黒人の男の子と遊んでいるがばかりにぶつけられてきた軽蔑には、辟易していたのだ。こうなったら絶交しかない！　こんりんざい黒んぼ^{カフィー}の子どもとは関わり合いを持つな。それは父の決めたことだった。

そうした過去があって、いまがある。手を縛られたピートをひっぱりながら、ヤンの脳裏にはこんな思いが走った。いまこそ彼を逃がしてやって借りを返す、仔牛をなぶり殺しにした責めを晴らすというのはどうだろうか？

こう考え出したとたん、その思いは強く頭を離れなくなった。二人はまだまだ少年で、二人はともに育てられ、仲良く友達で過ごし、マリアさんも良くしてくれ、継母が食事を抜いてお仕置きをするとしたときも、彼女が食べ物を用意してくれたし、とにかく勇敢なピートは仔牛を殺した責めを肩代わりしてくれた。そこまで自虐的にふるまってくれたのだった。かつての借りを返すにはいまこそ絶好のチャンスじゃないか…

そして、ピートはというと、あらためてあの仔牛の一件を思い浮かべていた。あの無意味な平手打ちを食らった後、ヤンが自分のことを黒んぼ^{カフィー}の名で呼び始め、蔑んだ態度をとるようになったのを思うと、心底、ぞっとした。

——一度訊ねてみたいくらいだな。そんなことを考えた。——どうして、あんなふうにおれのことを扱ったんだろう？　おれは親切でやったつもりなのに、なんとというしっぺ返しだろう？　どうしてこんなことになるんだ？　でも低姿勢に出てまで訊ねることだろうか？　バカらしい、だれが訊ねたりするもんか！

それぞれに頭のなかをめぐらせながら、二人は警察署の前までやってきた。ヤンは一瞬棒立ちになった。いつかの映像が目の前に甦った。幼馴染の少年、そしてマリアさん、仔牛の一件…　ここで逃がしてやって借りを返せばいいじゃないか。

——おい、ヤン、そんなところで何をしている？　署の奥からだれかの声がした。ハッと眠りから覚めるように我に返ったヤンは、みずからを恥じた。「野蛮」な考えに身震いがするようだった。かっとう頭に血が上った。おまえは白人だろう、警官だろう、務めを果たすのみだ！

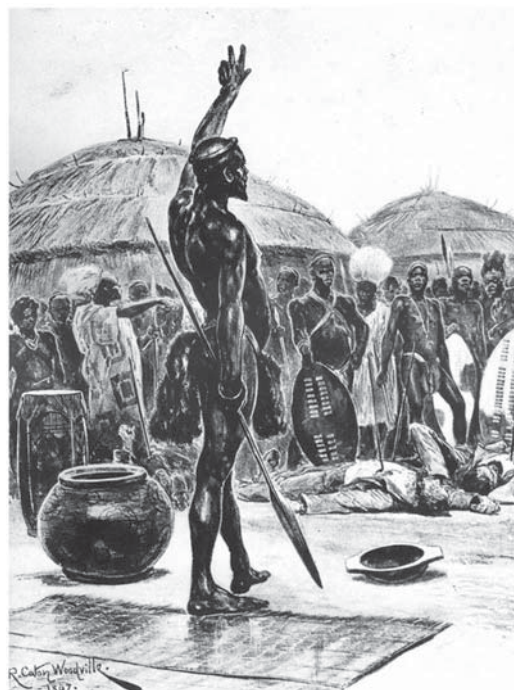
それはまるで自分を言い聞かせるかのようなふるまいだった。署の中に足を踏み入れるや、彼はピートを荒々しく引っ張って叫んだ。

——坐りやがれ、呪われた黒んぼ^{カフィー}め！　こいつ、逃げようとして抵抗しやがった。だからとっつかまえて連行したんだ。

ピートはひとことも言葉を発しなかった。ただ、黒人の巡査が手を引っ張って鉄のバーの向こうへ引きずって行こうとしたとき、その目は乞うようにヤンの目を捉えようとした。ヤンは顔を背けて、ピートが連れて行かれるさまを見まいとした。そして、ピートは思った。生まれたての仔牛を殺した犯人がおれだと、父親にチクリるだなんて、ヤンの気持ちはそのときどんなものだったんだろうか？

注

- 1) ナポレオン戦争の時期に始まった英国人のケープ植民地上陸に始まって、それまでの土地を追われたオランダ系ボーア人は、「開拓」Voortrek と称して、北部への移動を始めた。その行く先々では先住種族（ズールー人）との土地争奪戦が待っていた。1838年の戦いで勝利を経て、翌年にナタール共和国（Natalia Republiek）を建国。この共和国も1842年には英領ケープ植民地に併合されてしまうが、この勝利の日にはボーア人にとってはずっと記念日であり続け、20世紀半ばの「アパルトヘイト」期に入ってから、アフリカ民族会議（ANC）は1961年、これを抵抗の記念日とした。今日でも「和解の日」として、この日は新生南アフリカ共和国の祝日である。なお、「ディンガーン」Dingaan は、ズールー族の指導者 Dingane ka Senzangakhona のアフリカーンス語名。ボーア人歓迎の宴で客を裏切ろうとしたために、返り討ちにあい、1840年1月にはついに殺害された。
- 2) 原文の1836年は誤り。
- 3) アフリカーンス語の「サンボク」Sambok もしくは「シャンボク」Sjambok から来ている。語源をたどるとマレー語、さらにはペルシア語まで行きつくと言われ、アフリカでは奴隷を威嚇、もしくは処罰する道具として使われた。



①戦士ディンガーン（ディンガネ）

http://en.wikipedia.org/wiki/File:Dingane_-_%27Bulalani_abathakathi%27_-_1847.jpg

（本学先端総合学術研究科教授）